薔薇の葬送

根来 澪子

（その一）　新型コロナウイルス

コロナ禍に翻弄された二〇二〇年が去り、二〇二一年が始まった。「勝負の三週間」とか、「我慢の三週間」など、政治家はスローガンを駆使して十二月中の感染の終息を呼び掛けたが効無く、それどころかますます広がって、年末は新規感染者が千人を超える事態になり、新年早々又もや緊急事態宣言が出される事態になった。昨年のステイホームが再び繰り返されるのである。二十六年間、一人で暮らしている私は孤独には強いが、それは自由を伴うはずのものであり、自由を奪われた孤独はまことにやるせなく、映画鑑賞、友人たちとのランチ、近隣の街でのコーヒータイムなど、ささやかな行動さえ自粛の対象になっている日々が延々と続くことを思うと暗然としてしまう。しかしこれも昨年同様、命を脅かす危険のあるウイルスに感染しないためのわが身を守る手段であれば致し方ないことだと自分に言い聞かせてはいる。感染症の災禍は人類出現とともに始まり、コレラやペストなど歴史上何度も繰り返され、悲惨な先例を知ってはいるはずだが、まさか自分がその只中に遭遇するとはおもってもみなかった。昨年のお花見は、来年の楽しみに取っておいてくださいと為政者はいとも簡単に切り捨て、様々な催し物が中止になったが、果たして今年はどうだろうか。また来年に持ち越しになるのであれば、高齢の私は壽命のほうが終わってしまう。何とか今年は晴れやかな春をむかえたいものである。

元日は、東京の娘の自宅で孫たちとお節料理を囲み、ささやかなお祝いをした。二十代の孫たちは元気そのもの、しかし彼らと長居をするのは危険だからという娘の意見で、心を残しながら早々にお暇した。とぼとぼと人出の少ない繁華街を歩くのは寂しい。照明を落とした商店は無言の抗議をしているようで、街は人で溢れているほうが自然なのだ。

代り映えのしない正月であったが、その後、三、四日経って、ボーイフレンドのHから電話があって、知人から玉露を頂いたから一緒にお茶をしないかとお誘いがあった。

六十代は人生の華、続く七十、八十代と独身だったので、何人かのボーイフレンドがいたが、ここ二年の

間に同じサークルで活動を共にして、文学を語りあった同期の三人と永いお別れをした。八十代後半ともなればそんな年齢の最中で、いずれは私も、と覚悟はしているが生活のなかに穴が開いたようで寂しさは年々募っていく。男と女であるから、年齢とは関係なくそこになにがしかの感情に流されることもあるが、そんな瀬戸際を通り越して、馥郁たる友情が芽生える男性がいる。長年社交ダンスをやってきたので、ダンスのリーダーとしての付き合いのある人もいて、「ここで一緒に死ねたらいい」とすがりつくほどの破滅的願望を抱きたくなるような、蠱惑的な男性に出会ったが、その場限りと見定める自制心を持っていたので、私の生活は健全なものとして今日に至っている。今は世間でいうところのお茶のみ仲間として長く続いている複数のボーイフレンドがいる。

Hもその一人で、パソコン教室で知り合って以来、十二年半の付き合いになる。彼は我が家を訪問し、車をわが家の駐車場に止め、夜、十二時すぎまで喋りまくっていく。高齢とはいえ私は夫を失った独り身の女性である。隣近所の人はどう思うだろうか。という常識的な配慮も彼にはないようだった。第一彼は私に対して何らやましい気持ちはなくて、ただ話し相手として面白いだけであろう。話している内容を聞いたら隣人はがっかりするだろう。日々テレビで報じられる政治や歴史とか、二人とも大好きなヨーロッパの風景の話だとか、まったく色気のない話題は次々と飽きることなく、共感と反論を繰り返して延々と続く。男女のしっとりとした場面を想像しているに違いない近所の好奇のまなざしを期待させるような濡れ場はない。しかも彼は私とほぼ同年代で独身である。二人とも独り身であれば、世間的には一緒に暮らしてもいい環境にあるのだが、そして私ももちろん嫌いではないが、そうしないのは、お互い亡き配偶者の遺品にどっぷりと浸かって生活している、今更と思うし、何よりもフレンドは複数のほうが楽しいのだ。それはお互い様で、彼も自由に若い女性とデートをするという華やいだ時間を持つのはすばらしいことだし、それは私にとっても全く同様である。

玉露とあればお茶うけに、和菓子が必要であろう。手土産に正月らしく、花びら餅を買った。これは香淳皇后の好物だったという、味噌餡を中に練り込んで牛蒡で飾り付けた、新年を代表する上品なお菓子である。

嗜好品に関しては、お酒が飲めない分、コーヒー、紅茶、煎茶などに、一流の味覚を持っていると自負し

ている。玉露など、めったに飲むことのない最高給茶である。志野焼きの茶器、玉露セットを持っているので持参しようかと思ったが、彼の家にもあるということで、電話があった翌日にウキウキして出かけた。

彼の家は桜並木の奥の、公園を間近に控え、緑の多い木立に囲まれたシックなマンションである。ドアのチャイムを鳴らし、ずかずかと上がり込んでリビングのドアを開けた。彼はソファに沈みこむようにめり込んでテレビを見ていた。にっこりして「おめでとう」と人並みの挨拶をする。彼も挨拶に応じた。部屋はむっとするほど暖かい。

ひりひりするような冬の外気に吹かれてきた身には異常なほどの暑さである。「暖房が効きすぎているんじゃないの」といいながら分厚いオーバーコートをぬいでソファの背もたれに掛け、ほんの少し、換気のため窓をあける。だれが持参したのか、出窓に飾られている正月用の千両に水仙をあしらった生け花もこれでは長持ちしないだろう。彼は無言のまま録画しておいたらしい戦国時代の武将の映像を見ている。いつもに似ず、あまり反応がないので、「元気がないのね、具合でも悪いの」と尋ねてみる。

「朝、七度三分の熱があったんだ」とさりげなく呟く。今は昼の一時過ぎ、思わず背中がぴんと伸びた。「え、それは大変、今また計ってみてよ」彼は立ち上がるのもおっくうそうで、ダイニングのテーブルの上にある体温計をとってくれるようにと私に頼んだ。私はせかせかと取り上げて彼に渡す。ちょっとだけ触れた手が生ぬるい。沈黙の中で熱を測った。「何度あるか、見て」と自分では確かめることなく私に渡した。体温計は七度六分を示している。動悸がして身構えた。

「これってもしかしてコロナの熱じゃないの、あなたコロナにかかったんじゃないの。どうしましょう」。常日頃、最も恐れている事態に遭遇し、めまいがして倒れそうになるほどのショックを受けた。この場を善処

する何かいい案は、と素早く頭の中をかきまわす。思いついた。「訪問看護師さんに電話して早く来てもらうのが必要だとおもう。こんな時こそ役にたってもらわなくちゃ」早口で一気にまくしたて、脱いだばかりのコートを再び着込んで彼から最も遠い位置にあるダイニングの小さな椅子に浅く腰かけた。私の剣幕におされ、「そうだね」とつぶやき、彼はのろのろと携帯で看護師事務所に電話をした。いつも健康に関しては万全の注意を払っている筈のHである。一昨年、自宅玄関前で転んで骨折し、長期入院を経験してからは、一人暮らしの不安もあり、万一に備えて週に一度の看護師の訪問を受けているのだ。血圧やら脈やらの検診もさることながら、彼女は美人であることが一番のお気にいりなのである。笑うとえくぼがでてチャーミングだが、残念ながらこのごろはマスクで覆われている。

電話でのやりとりは長引いたが、とにかく三十分後に来てくれることになった。私は、発熱という典型的な症状で、彼はコロナウイルスに感染したと確信した。すぐにでもこの場を去りたい心境だった。元日は親せき五人と一緒に真鶴のレストランにいって魚料理のコースを食べたという。五人の中には四〇代の若い夫婦もいたのだ。店内には見知らぬ客も大勢いたはずだ。なんという無防備さだ。きっとその時に感染したにちがいない。今この彼の自宅にいる私は濃厚接触者ということになるのだろうか。私もコロナを疑われ、保健所によびだされ、ＰＣＲ検査を受け、万が一感染していたら症状がなくても二週間の隔離を余儀なくされる。その噂は素早く私の友人、知人に知られ、風評被害に晒される。娘は驚愕と不安で強いショックをうけるだろう。あれこれ想像を巡らせて沈鬱な気分に落ちこみ、出来るだけ彼から離れた場所の、部屋の隅で縮こまっていた。本来なら「苦しい？」とか、「心配ね」、とか、彼の病状に対するおもいやりを示すべきだったが、それどころではない私の態度は自分本位そのものだった。彼はおそらく私の動揺を察したに違いない。あからさまな態度にでるほどのうろたえぶりだったのだ。玉露やおしゃべりを楽しむどころではなかった。

三十分ほどして、待ちに待った訪問看護師のＳさんがやってきた。予定の時間に遅れはなかった。まさに地獄に仏、Ｓさんには後光がさしていた。彼女はなんと、防護服を着てきたのである。テレビでよく見かけるビニール製の割烹着状の上着、頭も顔もすっぽりと透明なビニールで覆っている。

「コロナですかっ」思わず叫んでいた。「こんな格好で

ごめんなさいね。何しろこの時期、熱があると聞けば真っ先にコロナを疑うことになっているの、看護事務所の所長が念を入れて、ということでこの服装になったの、もちろんまだきまったことではないのよ」看護師はさすがプロ、躊躇することなく彼の傍に近づき、目線を合わせるように彼の間近にしゃがみこんだ。真っ先に脈をとり、熱を測った。私が訪問してから一時間ほどの間に熱は三十八度に上がっていた。彼はぐったりとして物を言うのもけだるそうな感じである。

熱はいつからでたのか、咳は？胸苦しさは、喉の痛みは？食べ物の味はわかりますか、など、コロナの症状を疑っている質問ばかりである。

彼は低い声で適当に答えているようだが、私はそれどころではなく耳に入らなかった。わが身大事の一念でキッチンへと逃げ込んでいたが、おそるおそる首だけリビングの方に向け、「私はどうしたらいいでしょう」と看護師に聞いた。

彼女は改めて私の存在に気付いたようで、「そうね、良く調べないとまだわからないけど、やはり疑ったほうがいいとおもう。濃厚接触者にならないようにすぐ帰った方がいいと思う。家に帰ったらよーく手を洗い、うがいをしてください」威厳をもって重々しく言った。

私はあたふたと彼に話しかけた。「Hさん、万一のこともあるから今日は、私はこれで帰ります。Sさんの指図に従って動いてくださいね。きっと病院に行くことになると思うけど、また夜にでもお電話をします。気持ちをしっかりと持って、お大事にね。ご一緒にお茶ができなくて残念だったけれど、キッチンに玉露の缶があったから、いただいていいかしら」

彼はのろのろと私の方に振り向き、「ああ、いいよ。お茶はあげる。家に帰ってゆっくり飲んだらいい。」まだ封の切っていない、玉露の缶をバックに放り込んだ。

看護師が彼のお世話をして何らかの処置をするのだから私に後ろめたいことはないはず、と自分に言い聞かせ、戸外に飛び出した。時計をみた。二時二〇分、一時間一〇分ほどの滞在であった。この時間、同じ空間を共有したことは濃厚接触に繋がるだろうか。晴れ渡った青空に日光がさんさんと降り注いでいる。ソファに掛けた私のコートにも菌がついているかもしれない。日光は消毒もしてくれるだろう。私は真冬のはかなげな陽ざしも貴重に思えて、できるだけ日差しを浴びながら歩いた。帰宅して丹念に手洗い、うがいをしたのはもちろんである。

夜、おそるおそるHの携帯に電話をした。彼は想像

通り救急車で運ばれ、入院していた。看護師が手配してくれたのだろう。ＰＣＲ検査は陰性だったとのこと。胆石が詰まって炎症を起こし、それが原因で熱がでたのだろう、との診断だったという。いずれ手術をすれば回復するようである。すっと背負っていたものが軽くなったような。それにしてもほうほうのていで彼の家を辞した私のうろたえぶりは失礼ではなかったかといささか申し訳ないような気分だった、が高齢者の感染率は日を追うごとに数を増している。罹患したら大事だ。Ｈも理解してくれるだろう。

（二〇二一年　一月）

（その二）　葬送

令和三年二月初め、Ｈは病院から退院することなく永久に去っていった。八十八歳の生涯であった。斎場の部屋の周りは花で溢れていたが、線香も読経も、そして遺影さえなかった。彼は全くの無宗教で形式的なことは嫌っていたのでただ棺を囲んで故人を偲び語りあう家族葬であった。

喪服姿の私は棺の前にたち、デスマスクを見おろしていた。彼はすましこんで、よそ行きの顔をして神妙に目を閉じていた。周囲には十五、六人の黒い服の人たちが影絵のようにうごめいて在りし日の思い出話を繰り広げている。Ｈに縁のある人たちだ。頑固な性格だったので苦労したと近しい人たちはエピソードを交えて笑いあったりした。涙のない爽やかな別れであった。私もその中の一人、そっと持参した赤い薔薇のブーケと封書を彼の足元に置いた。彼は両腕の間に、テープで包まれた妻との、結婚以前の往復書簡の分厚い手紙の束を抱いている。二四歳で同年の妻と結婚したという彼は、妻亡きあとも六十数年前の妻からのラヴレターを保管し続けていたのだ。デスクの奥深くにあったものを親戚の一人が見つけた。

手紙は今、彼の旅立ちと一緒に同行する。そして自宅のいたるところに飾られていた彼の妻のおびただしい写真の束も一緒に。私が知り合う以前の彼の妻への想い、いかに彼が妻を愛していたか、あの世で会うのを楽しみにしているだろうと親戚の人たちは語りあっている。私が彼に宛てて書いた手紙など、何ほどのものではない。

家族葬のなかにあって、私はこの場に招かれたことだけでもありがたいと思うべきだろう。血縁関係のない唯一の他人なのだから。やがて遺族は棺を祭壇の花で埋めた。ランや白百合や紫色の花の中で私の赤い薔

薇は、場違いのようにすこし恥ずかしげであった。親戚の一人が「長いこと友達でいてくれてありがとうございました」と挨拶をしてくれた。「あなたのおかげで、Hも一人暮らしのさびしさが紛れたことでしょう」と。そう、寂しさを分かち合っていたのはお互い様。それが今、終わろうとしている。ぷつんと糸が切れたようにすべては終わる。私は彼の頬にそっと触れた。冷たかった。氷のように。刺すような痛みが指に走った。十二年半の付き合いが走馬灯のように流れた。

私は十二年前に『薔薇に溺れる』というエッセイでHとの出会いを書いた。Hと知り合ってはじめて彼の自宅を訪ねた時、マンションの玄関に足を踏み入れた途端、廊下や各部屋の壁を埋め尽くすかと思うほどにいたるところに飾られている妻の写真に圧倒された。そしてリビングのテーブルの上の薔薇の花々。一年半前に妻を失っていたHは尋常でない精神のなかにあったのだ。子供のいない二人は何度もヨーロッパを旅したという。古城をバックにして佇んでいる彼の妻の写真は薔薇に囲まれてうっすらと微笑んでいる。エッセイで私は次のように書いている。

《彼は言った、「妻です。一年半前に亡くなった妻です。すぐそばに薔薇園があって日曜日ごとに二人で薔薇を買いに行くのが習慣になっていました。病気が発覚した時はもう末期であっけなく逝ってしまったのですが、葬儀の時に薔薇園から一対の白薔薇の供花を贈られ、棺を薔薇で埋めました。その時から薔薇を買い続けるのはもう私の義務なのだと、私の健康の許す限り薔薇を飾り続けようと決めて一年半になるのです。私は信仰を持っていないし、肉体が消滅すればすべては無だと思っているのですが、部屋中の薔薇に囲まれていると妻が傍にいるような気がして落ち着くのです。丹念に薔薇の手入れをしている薔薇園の奥さんに男の一人暮らしを同情されながら花だけは飾り続けているというのは変でしょうかね。」そこに姿はなくても現実以上の実在の存在として妻は私を凌駕していた。部屋を彩る薔薇に溺れて、わたしは全身から力が失せるようでその場にうずくまった。》

それから一年後に、Hとの別れを書いたエッセイ『冬の薔薇』は次のように続く。

《リビングのあちこちから私を見下ろす写真の妻は「ここはあなたのいるところじゃない、帰って！」と叫んでいる。彼は海外旅行で撮影してきたビデオをみながら同行した在りし日の妻を追い続けている。

カメラは中世のヨーロッパの、石畳の街を散策する女性の後姿を追っている。彼女は数歩歩いては振り返り、語り掛けるようにカメラを覗いて微笑む。「こうしていつもビデオをみていると奥様は生きていらっしゃるような気がするでしょう」「いや妻は私が最期を看取り、茶毘に伏して私の手で霊園に納骨したのです。でも夜などふとキッチンで食器を洗っているような音がして、もしかしてと思って確認に行くのですがもちろん空耳でした。妻はもうどこにもいないのです」彼は静かに笑った。

この一年間、私達は語りあい、小さな旅をし、折々の四季を眺めてきた。充実した楽しい日々でもあった。しかしこの家に私の居場所はないことを改めて知る一年でもあった。彼の妻にたいする五十年間の愛は私のありきたりな癒しなど届かないほどふかいものであった。私の同情を拒絶するものであり、彼はいつも亡き妻を身にまとっていて、彼にとっては当然の「変えようのない、かくあるべき一年」であり、私にとっては「不毛の一年」であった。彼の家を再び訪れることはないと決心し、敗北感を背負って私は彼の元を去った。リビングの、出窓のレースのカーテン越しに淡く漏れる冬の陽ざしのなかで、妻のために買い続けている薔薇の花々がかすかにさざめいた。》

＊　＊　＊

冷気をふくんだ秋の風が頬に爽やかに触れる季節、Hとの別離から五か月が過ぎていた。市内の公民館の講座で「パワーポイント」というパソコン講座があってHと再会した。

「お久しぶり！」という挨拶でごく自然に話が弾んだ。彼は日に焼けて心持肥ったようであった。声に力があり、懐かし気な笑みさえ浮かべていた。私達はふたたび食事をし、小さな旅行をし、交際が始まった。出会いのころの陰鬱さは忘れてしまったように新しい話題に熱中した。相変わらず日々新たに起きるニュース、政治のこと歴史のこと、そして食べ物の好み、温泉等々。彼の妻が話題になることはなかったし、お互いに私生活に立ち入ることは暗黙のご法度で彼の家を訪ねても、リビングとキッチン以外、私的な部分には一切触れなかった。室内に飾られている妻の写真は常識の範囲内に収まっていた。彼を癒したものは「時間」の流れだろうか。それとも彼の確固たる意志で克服したのか。花びらの開ききった薔薇は申し訳程度に二、三本ガラ

スの瓶に挿してあった。

玄関の下駄箱の上に何処の麗人が活けたのか、何の流派か知らないが、志野焼きのシックな花器に、四季の生け花が飾ってあることもあったし、二人でお茶を飲んでいるとき、女性から電話がかかってくることもあった。彼は照れながらも悪びれることなくデートの約束などしていた。週に一度ぐらいの割合で会っていたが、私達はそんなことに目くじらをたてるような付き合いではなかった。彼がどんな女性と何処へ行こうと私には干渉する資格はなかったし、私にも映画を見たり、コーヒーの美味しいカフェをはしごしてお茶を楽しむボーイフレンドがいたからだ。

Hとは見事なほどの友情に結ばれた関係であったと思う。「気が合う」のではなく「話が合う」のだ。彼は営業を主とした平凡なサラリーマンとして定年を迎えていたが、いわゆる「歴史オタク」で八十歳近い年齢になってから、ハードカバー絹張りの豪華な表紙の歴史書十五冊、ヨーロッパへの紀行文エッセイ集二冊、合計十七冊を自費出版した。例えば『大日本帝国落日の詩（うた）』とか『戦雲二十年昭和天皇の世紀』『室町幕府と足利氏十五代の盛衰』等など。Hの集中力は恐るべきほどであり、四、五年に一度ぐらいの割で、惰性でエッセイ集を自費出版する私とは志に格段の相違があった。「生活などというものは召使に任せて置け」とうそぶいたのは、名前は忘れたがフランスの高踏派の作家の言葉だが、彼も歴史の話題になると、食べることも寝ることも念頭にないような熱の入れかたで喋りまくる。そんな話題を延々と何時間もさ

れてうれしい女性はそうはいないだろう。原稿の読みあわせに付き合うこともあった。「こんなことも知らないのか」と言われ、腹が立ち「こんな文章は中学生並み」と貶したり、それでも本が完成すると私もうれしくて自然に仲直りをしていた。黙々と彼に付いていった私も日常茶飯事の退屈な話題より、よほど楽しかったので苦痛ではなかったのだ。私達はホテルでベッドを並べて休んでいても、明け方の三時、四時まで語りあうだけのピュアな関係であり、また、誕生日には豪華なステーキをディナーで御馳走になるようなうれしい関係でもあった。

思えば彼とは心の奥深い部分で本心を語りあったことは一度もなかったことに気付く。私生活で依存しあうこともなかったし、彼に私のネガティーブな部分を見せたことはなかった。彼もおそらく自分の本音をぶつけてきたことはなかったと思う。もし、心の底を見せ合っていたら違う展開になっていたかもしれない。透明なアクリル板で隔てたようなお互いの理解、それは私の望むやり方であったといえる。彼に限らず、どす黒い生な感情でお互いの生活の垢をなめあうような友情を私は嫌いだったのだから。

このような日々がもっと続いていくと信じていたのに、突然崩れたのは彼が転んで骨折をして五か月間入院し、その後、老人施設で六か月、一年近い歳月を自宅で過ごせなかったことによる。もともと歩くのが嫌いで、電車に乗るのでも、駅まで自宅から歩いて十分程度の距離でさえ車を使った。どこへ行くのも車であった。足の筋肉は衰えていたとおもうし、偏食がたたって、体力は最低の状態だったと思う。

今年、令和三年一月初頭、玉露が手に入ったという電話をもらい、彼の自宅を訪問したとき、彼は発熱していて、訪問看護師の手当で再び病院に運ばれたのは前に書いた通りである。入院当初、胆のう炎の手術にあたり、絶食が続き、体力、気力をなくし、全身衰弱の状態だと、か細い声で電話があった程度で、携帯を持参しての入院だったが、私の方からは電話をしないようにという要望だったので、一方的に彼からの連絡を待つほかなかった。おまけにコロナウイルスの感染を防ぐためにお見舞いの面会にも行けず、どのような経緯で回復不可能になってしまったのか、詳しい事情を知ることもできなかった。

意識不明の重体という親戚からの知らせを受けて病院に駆けつけた時、親族以外は面会不可であったが、一〇人ほどがたむろしている彼らに交じって病室に紛

れ込んだ。Hはもう意識はなく呼びかけても、反応はなかった。荒い呼吸で生死の間をさまよっている心境はどのようなものだろうと、聞きただしたい想いで、むなしく名を呼び続けた。聴覚は最後まで残るという言葉を信じて。何か言いたげに唇がかすかに動いたような気がしたが、私の思い込みかもしれない。

Hはその夜、穏やかにこの世を去っていった。無念だったのか、覚悟してのことだったのか、諦めだったのか、それとも自ら望んだことだったのか、家族のない彼を全面的にバックアップして最期を看取った親戚の方から、一切の延命治療は不要という遺言があったと知らされた。

亡くなる一週間ほどまえ、彼から突然、携帯で電話があった。「今度はもうだめだと思う。長いことありがとう」とはっきりといった。私は突然のことで何と返事をしたのか覚えていない。彼は常日頃ほとんど「ありがとう」の言葉を言わない人だったのにお礼を言われて当惑してしまった。

私が彼から「ありがとう」と言われたのはそのときと、ずいぶん前、彼の妻が眠る霊園に詣でて妻の墓に花を手向け、手を合わせたときに彼は驚くほどはっきりと、大きな声で「ありがとう」といった。あまりにも真摯な言い方だったので鮮明におぼえている。そして今また彼は二度目になるお礼の言葉を言ってくれた。

花に埋もれたデスマスクに向かって「Hさん、あなたほんとに何処に行ってしまうのでしょうね」とつぶやいた。参列者の一人の男性が「きっといいところにいくと思いますよ。だって帰ってきた人は一人もいないんだから」

「そうそう」と皆同調して笑いあった。Hは天国と呼ばれる神の国に行って、美しい花々に囲まれて、分骨してあった妻の遺骨と一体になり、楽しく暮らすに違いない。

黒塗りの霊柩車に続いて、葬列を作って数台の親戚の車が走り去っていった時、不意に涙が流れた。涙は次々と溢れて不思議なほどであった。再演することのない人生の一つの幕がおりた。彼が去ってしまった空白を埋めるために私は新たな挑戦を模索しなくてはならない。

今、私はHへのこれが最後となるエッセイ『薔薇の葬送』を書く。

——年々（としどし）にわが悲しみは深くして
いよよ華やぐ命なりけりーー

岡本かの子の句だが、これからの私のみちのりにも

華のあることを信じて。

春になり、桜が咲くころ、納骨が終わったら私はHの眠る霊園を訪れようと思う。富士をバックにした霊園は桜の名所でもある。幾百の墓苑の霊気をはらんで妖然と咲き誇る無数の花びらは「あちらの世界」から降りてくるようだ。「来なくてもいいよ、どうせ会えないんだから」という声が聞こえそうだ。しかし、万感を込めて私は彼に語り掛けたいと思う。亡くなるまで気づかず一度も言っことのない「好きだった」という言葉を。

（二〇二一年　三月）

霊園の桜